

法事輻輳

このところ法事が頻回である。

かなりの数、買い置きしておいたつもりの香典袋がもう無くなっている。香典袋は買い置きするものではないと縁起担ぎの甘木さんから聞かされたことがあるが、葬儀がこうもたびたびだとなかなかそうもいつてられない。今年何度目の葬式になるのか、今夜も仕事場の斜め向かいのSさんの通夜が六時から自宅で。

この春、胃癌を見つけて市内の病院を紹介した。手術は一応可能な状態だった。退院後しばらく自宅療養を続けていたが、何度目かの来院の時、近頃便が細いというので診たら骨盤底にこりこりの塊を触れて愕然とした。転移だった。この具合だと最初に胃に病変を見つけた時既に、少なくとも顕微鏡のレベルでは転移があつたわけで、それが判つていれば胃切除、特にリンパ節郭清を伴う胃癌根治手術は初めから無意味だったことになる。最初に直腸指診を試みていればあるいはもう触れ得る大きさになっていたのかもしれないが、申し訳ないことに私はそのことは全く念頭になかった。病院での術前検査でも発見されないし、癌の手術で開腹したら最初にやることは体表からの検査では判りにくい腹膜への播種性の転移巣を探すことで、もしそれがあれば根治手術は中止にするところだから、胃切除が遂行されているということは手術の時には骨盤底への転移はまだ小さくて判らなかつたのである。また同じ病院に紹介して人工肛門を作って貰ったけれど、今度は退院出来るまでには回復しないまま、訃報を昨日聞くことになった。全経過僅かに半年。「一円硬貨の旅鳥」が得意だったSさんはさつさと旅立ってしまった。

先月二十一日、佐久の義母逝去。

梅雨の頃、咳が続くので佐久病院で胸部のレントゲン写真を撮って貰って大きな肺癌が発見されたが、八十八歳という年齢から手術を回避して自宅で死を待つ状態であった。義母自身も子どもたちも覚悟していた死だった。

妻に「スミエちゃ」と呼びかける独特の佐久弁が懐かしい。妻と知り合って三十余年、随分とお世話になった。今頃私達の末娘「サナエちゃ」と再会していることであろう。

謹啓

去る十月二十一日すみ江の母やすが永眠
しました。八十八歳でした。

信州南佐久小海に生まれ、白田の土木技
師に嫁して早く寡婦となり、女手ひとつで

三児を育て上げた肝玉母さんの典型でした。
いま北に浅間の噴煙を望む千曲川畔にこ
の人を見送つて、私達の係累に明治生まれ
は居なくなりました。

寂寥の感ひとしおです。

右の次第で、この歳晩、明年始のご挨拶
を失礼させて頂きます。

海に出て木枯帰るところなし 誓子

平成十年師走

田中すみ江

迪夫

十一日は実母まつこの命日。一昨年の今夜、眠つたまま醒めることなく、独り逝つた。享年九十三歳。たまたま明日は水曜日で午後外来は休みなので、往診を四軒済ませてから独り墓参に行くつもりになっている。

父母の墓は備中高梁の、高梁川に沿つたこじんまりとした町並みを東側から見おろす山の中腹にある。七十四歳で一足先に帰幽した父に二十五年ほど遅れて母が合流再会したことになる。私のは墓参といえるかどうか、掃除をするでもなく、経を誦するでもなく、ただ、墓前にしばし佇んでくるだけの横着な、勝手気儘な訪問である。

今年はずいぞうに役場に立ち寄つて自分の本籍地を現住所に移す手続きをして来る予定。もつとも我々夫婦にとつては、あれこれ戸籍謄本を必要とした時期はとくに終わつていて、いまさら思いついて移籍しても息子たちが私達の死亡届を提出するのに便利になるだけのことではあるが。

備中松山藩の城下町であり、高梁川の中流にあつて高瀬舟の拠点として吉備高原の物資の集散地であつた高梁は亡父の故郷である。生前、父がしばしば話題にしたので懐かしく、良く知っているような気がする町だが、私自身は住んだことはない。町を挙げての名物盆踊り、父が所作も、謡うのも得意だつた「松山踊り」を覚えようとは思われないが、せめて一度は見物に来なくてはあの世で父に会わず顔がないと、気になりながら二十五年が経つてしまった。もう間に合わないかもしれない。

謹啓

去る十一月十一日早暁、母まつが帰幽

いたしました。享年九十三歳でした。
不足の無い年齢といえますし、かねて
覚悟していたことではあるのですが、今
はもう主の居ない椅子をみるにつけ、許
されればこの人ともうすこし一緒に居た
かったという想いがひとしおです。
右の次第でこの歳晩、明年始のご挨拶
を失礼させていただきます。

何事か起きる茜の急坂を
のぼりきるにはもう間に合わぬ

斉藤すみ子（淡紅）

一九九六年師走

鎌倉市常盤九三七―一八七
田中迪夫
すみ江

（五時通信 一九九八年十一月十日）